

Title	をのこの方法：土佐日記の場合
Sub Title	A method of the fool : the case of Tosa nikki
Author	東海, 亮造(Tokai, Ryoza)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.76, (1999. 10) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	黒岩純一, 平尾浩三両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00760001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

をこの方法

——土佐日記の場合——

東海 亮造

一

紀貫之は、延長八年（九三〇）正月の除目で、土佐守に任命された。足掛け五年任国土佐で過ごし、承平四年（九三五）十二月二十一日、土佐守の任終えて、土佐国の国府を出発した。海路の旅である。京都の我が家に着いたのは、翌五年（九三六）二月十六日である。この旅のこと書いたのが『土佐日記』である。この旅の日数を数えると、五十五日も費やされている。往路の旅は、竹内理三氏が「『延喜式』では、土佐と京との連絡は、陸路でも水路でも、どちらでもよいとされている。紀貫之が、ここ（山城国山崎―筆者注）から水路をとったか陸路をとったかは、明らかでない。だが土佐日記のかきぶりから見ると、貫之の往路は、陸路によったらしいことが、何となく想像される」（『土佐日記全注 釈』付録月報「土佐に赴任するの記」と述べている。これを受けて、村瀬敏夫氏は、復路について、「帰途海路によったのは、その頃すでに瀬戸内海及びその沿岸地方は海賊が跳梁して、陸路を取ることができなかつたからであろう」

〔紀貫之伝の研究〕三六八頁〕と述べている。

『土佐日記』にも、海賊に関する記事が、

○船君なる人、波を見て、国より始めて、海賊報いせむといふなることを思ふうへに……（二月二十一日）

○「このわたり、海賊のおそりあり」といへば、神仏を祈る（二月二十三日）

○「海賊追ひ来」といふこと、たえず聞こゆ（二月二十五日）

○「海賊追ふ」といへば……（二月二十六日）

○「海賊は夜あるきせざなり」と聞きて……、今は和泉の国に来ぬれば、海賊ものならず（二月三十日）と多く書き記されている。どちらの路を採っても、海賊に襲撃される危険はあったわけである。

当時、土佐国からの「租庸調」、特に「調」の搬送は、当然、海上輸送であろう。貫之にとって、土佐国から、持ち帰る荷物（土佐で蓄えた資産、財物）のためには、どうしても海路でなければならなかったのである。往路の行程の逆を採ったとするならば、何度も荷駄の積み替えをしなければならないという煩わしさが生ずるのであろう。

この旅の出発は、「十二月の、二十日あまり一日の日の、戌の時に、門出す」とあるように、戌の時、現在の午後七時から九時までの時間帯の出発。なぜ、こんな遅い時間に出発するのか、不思議である。しかし、「吉日やよい方角を定めて出立するため」（木村正中『日本古典集成』一一頁）、「平安朝の他の作品の用例からみて、日の吉凶や行く先の方角の関係からいったん別の地へ移り、そこで準備を整えて、改めて目的地へ出発することが多く、その最初の移動を「門出」としようするというのが今では常識である」（品川和子『土佐日記全訳注』一六頁）、「当時の旅の出発は人目を避けて暗い時分が選ばれた」（菊池靖彦『新編日本古典文学全集』一五頁）。ほとんど同じような内容の文章である。あ

たかも当然であるかのように述べられている。

十二月という季節、夜の船行の危険性を考え合わせると、やはり、異常な時間帯である。夜の船行について、『土佐日記』の中で例のないことはない。

○「海賊追ふ」といへば、夜なかばより船を出だして漕ぎくる……（一月二十六日）

○「海賊は夜あるきせぎなり」と聞きて、夜なかばかりに船を出だして……（一月三十日）

しかし、これらは海賊の襲撃という緊急事態が発生したからである。やはり、この時間帯の出發には、なにか特別の理由があるに違いない。「調度やうのもの、或は、船につみはこび」（香川景樹『土佐日記創見』）などのためということも関わりがあるかもしれない。それだけでなく、更に何かがあるのかもしれない。項を改めて論及したい。

一一

土佐からの帰京は、承平五年（九三六）二月十六日、それも、

○夜になして、京には入らむと思へば、急ぎしもせぬほどに、月出でぬ（二月十六日）

とあるように、これも「夜」である。なぜ「夜」なのか。その答えは「今日、車、京へとりにやる」（二月十四日）、
「今日、車、ゐて来たり」（二月十五日）にありそうである。貫之達が乗る車もあるだろうが、土佐国から運んできた荷物を、京に運ぶための車でもあろう。萩谷朴氏は「なぜ夜帰るか」というと、それは、物見高く口さがない京わらんべの見せ物になることが、インテリ貫之の神経に耐えられなかつたからである。ずいぶん荷物が多いからといっては、よほどあくどい儲けをしたのに違いないと評判が立ち、あまり荷物が貧弱だからといっては、なんと甲斐性のない国司だと

馬鹿にされる。(中略)『更級日記』にも『粟津にとどまりて、師走の二日京に入る。暗くいき着くべくと、申の時ばかりに立ちて行けば』とあって、それが国司入京一般の風習ともなっていたらしい(土佐日記全注釈「四一頁」と述べている。では、貫之は「荷物が多い」国司であったのか、「荷物が貧弱」な国司であったのか。清廉潔白な貫之を考える説が多く見られるが、果たしてそうであろうか。「受領は倒れる所に土をもつかめ」(今昔物語巻二十八・第三十八)の信濃守藤原陳忠ほど、強欲ではないとしても、当時の国司並みの蓄財はしたのである。受領は、儲かる官職であると思われ、獵官運動をする下級貴族が多かったのも事実である。

帰京後、貫之は、二つの大切な事柄を実行している。一つは、『貫之集』の、

○三月つごもりの日、家移りするに(八二八の詞書)

○久しう住みける家を、住まじとてほかへうつるに、前におひたる松と竹とを残して(八七〇・八七一の詞書)の詞書から推測して、帰京して一月半程経った三月末に、転居したという事実である。現代の引っ越し事情とは、同じには考えられないにしても、共通していえることは、相当の費用がかかるということである。その費用の捻出は、やはり土佐守としての蓄財からであろう。

二つは、獵官運動をおこなったということである。『貫之集』の

○つかさならでなげくあひだに、正月の比、左衛門督のもとに、大殿によきに申し給へと、申しに奉らるるに、

奉り給へとて(八三一の詞書)

○つかさたまはらでなげくころ、大殿のものを書かせたまふおくに、よみて書ける(八七二の詞書)などの詞書に、貫之の獵官運動の必死さを垣間見るのである。

左衛門督は、摂政太政大臣藤原忠平の次男、藤原師輔とされている。兄は実頼。子どもには、兼家・安子などがおり、その安子が村上天皇の中宮として冷泉天皇を生んだため外戚となり、以後子孫はほとんど摂関家を独占した。大殿は、言うまでもなく忠平である。他にも『貫之集』にみられる、

○十二月のつごもりかた、身をうらみてよめる（八一三の詞書）

○世の中なげきて（八三八の詞書）

○十二月つごもりかたに、身の憂きをなげきて（八七四の詞書）

などの詞書を見ると、貫之は、県召、司召などの除目に任官がないことをあからさまに嘆いていることがわかる。

一般に、紀貫之をイメージするのは、平安時代の最高の歌人であり、現代風に社会的地位の高さを想像するが、摂関政治の社会では、従五位下であるから、所詮は受領階級、下級貴族に過ぎない。任官の有無は、本人にとっても、一族にとっても、最大の関心事なのである。それは、経済が大きく関わっているからである。『枕草子』（二十二段）にも、「すさまじきもの」の例として、「除目につかさ得ぬ人」を話題にしている。

それでは、貫之はどのような獵官運動をしたのであろうか。ひとつは、洋の東西、いつの時代も変わらぬ物量作戦であらう。時の権力者、例えば、忠平・実頼・師輔などに対する賂（まいない）、土佐国から運んできた金品を献上することによつて、歡心を買うという手法であらう。『土佐日記』に、次ぎのような記事がある。

○十二日、雨降らず。ふむとき、これもちが船のおくれたりし、奈良志津より室津に来ぬ。（二月十二日）

この記事によれば、貫之は、二艘の船で帰京したことがわかる。萩谷朴氏は「貫之一行が一艘の船に全員同乗したのではなく、二艘もしくはそれ以上の船に分乗していたことが明らかになる」と述べている。しかしなぜ遅れたかについ

ては「随行の船が何らかの支障を来たして、室津へあと二キロメートルというところで落伍したということも、考えられなくもない」（『土佐日記全注釈』一八五頁）としか述べていない。この時代の造船技術・航海技術の未熟さを考えると、後の船にも一行の半数の人間が乗っていたとしたと仮定したならば、生命にも関わることなので、貫之の乗船している船は、奈良志津でその船を待つて、室津の港まで伴走同行するのが通常ではないかと考えられる。そうしないのは、船乗り以外には貫之側の人間は、多くは乗っていないかつたのではないか。ほとんど積み荷ではなかつたかと推測される。積み荷の積載量の多さが、船足を遅らせたのではなからうか。その積み荷の中には、朝廷高官への貢ぎ物も含まれていたであろう。

○まさつら、酒、よき物奉れり。このかように物持て来る人に、なほしもえあらで、いささけわざさせさす。物もなし。（一月四日）

○船君、節忌す。精進物なければ、午時よりのちに、楫取りの昨日釣りたりし鯛に、銭なければ、米をとりかけ、落ちられぬ。かかることなほありぬ。楫取り、また鯛持て来たり。米、酒しばしばくる。楫取り気色悪しからず。（一月十四日）

○ある人、あざらかなる物持つて来たり。米して返りごとす。（二月八日）
などの記事から推測されている清廉潔白、廉直清貧の貫之という評価は、はたして鵜呑みにしてよいものか。阿漕、強欲とまではいわれないが、やはり当時の国司一般と同じようなことをやって蓄財していたに違いない。

しかし、貫之は、他の受領階級とは異なる立場を保持していた。それは、勅撰集『古今和歌集』の選者、屏風歌の作者としての立場、すなわち宮廷歌人としての立場である。

○延長八年土佐の国に下りて、承平五年に京に上りて、左大臣殿白河殿におはします御供にまうでたるに、歌つかうまつれとあればよめる（『貫之集』六九四の詞書）

とあるように、直接、時の権力者に会うことができ、直答できる機会を持つことができるのである。それが『土佐日記』の成立が大きく関わっているのである。

三

暦注に「具注暦」というものがある。陰陽寮で作成され、漢字だけで書かれたものである。上等な具注暦は書き込みができるように行間があいているので、間明（まあき）暦とも言われている。貫之は、過去の官職の履歴から考えても、具注暦は所有、携帯していたのではないかと推定されている。土佐から帰京の際も、当然携行していたであろう。旅行中、その具注暦に記録されたメモが、『土佐日記』の元原稿ではないかと言われている。

『土佐日記』の成立について、村瀬敏夫氏は「承平五年四月以後おそらく同年中に成ったのだろう」とし、「恒佐か師輔などの需めによって、その室たる大納言清貫女、あるいは勤子内親王に献じられた可能性も考うべきかもしれない」（『紀貫之伝の研究』四一七頁）と述べている。萩谷氏は「承平五年中のことであるとするとすれば、それは十二月二日、実頼君達の元服に際してこれを和歌入門の個人用教科書として進上したということも考えられないことではない」（『全注釈』四七〇頁）としている。

果たして帰京後、それほど性急に成立したものであろうか。目崎徳衛氏（『紀貫之』一五四―一五六頁）、の、『貫之集』（八三八―八四一）の藤原雅正との贈答歌の詞書「世の中歎きて、歩きもせずしてあるあひだに、三月のつごもり

の日、雅正朝臣のもとより、「後撰集」(巻四・二二二)の貫之の歌の詞書「月ごろ、わづらふことありて、まかりありきもせで、まで来ぬよし言ひて、文の奥に」を用いての「土佐から帰って、四十五年もの間貫之が官職にありつかなかつた歎き」の徒然の間という記述に注目すべきである。この間、獵官運動をしていたということになる。その結果、天慶三年三月、玄蕃頭となり、五月、朱雀院別当に再任されるのである。村瀬敏夫氏の「天慶元年の秋以後朱雀院別当に補せられるか」(『紀貫之伝の研究』四七〇〜四七五頁)という仮説もある。これらを勘案すると、承平五年中は、あまりに早すぎると考えられる。どんなに早くとも、承平七年(九三七)冬ごろから天慶元年(九三八)秋ごろではないかと推定される。仮にこの時期に、『新撰和歌』の撰述・編纂が行なわれ、歌集の体裁を成したとするならば、その時の、同時進行の、手すさびとして執筆され、『新撰和歌』とほぼ同時に成立したのではないかと考えられる。

承平五年二月十六日、帰京してから作歌したと推定される歌を、『貫之集』から抽出し、それを整理した先学の「貫之年譜」などをみると、屏風歌や時の権力者との贈答歌が多いのに気づく。詳細は、村瀬敏夫氏の作成した「紀貫之年譜」(『紀貫之伝の研究』四七〇〜四七五頁)などに譲るとして、承平五・六・七年にかけては、特に目に付くのである。

屏風歌は、どのようなときに詠まれるのであろうか。算賀・裳着・入内・大嘗会などの行事の際の調進によって詠まれる場合が多い。全てが喜ぶべき、めでたい行事である。当然屏風歌の歌人紀貫之も参加が許されたであろう。

公式の行事の後には、『竹取物語』の、

○よき程なる人になりぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳着す……この程三日、うちあげ遊ぶ。よろずの遊びぞしける。おとこはうけきはらず呼びつどへて、いとかしこく遊ぶ。

でも分かるように、祝宴、饗宴が催される。『源氏物語』の「紅葉賀」巻の例を出すまでもなく、歌舞が行われ、宴座といわれる酒宴の場が設けられる。

貫之の童名は「内教坊の阿古久曾」であるといわれる。それについて、目崎氏は「貫之の童名に『内教坊』の文字が冠せられたのは、彼の母が内教坊に房を持つ伎女か倡女で、貫之はこの女に通った望行との間に生れ、内教坊の中で育ったためではあるまいか」（『紀貫之』一八〇—一九頁）と推測されている。それを受けて、萩谷氏は「土佐日記に見られる貫之の歌曲・民謡に対する関心の強さや、土佐日記の構想に見られる戯曲作法の巧みな導入にもつながるものとして、その母を内教坊の女性と仮定することは、まことに興味深いものがある」（『全注釈』四四九頁）とも述べている。上記のことから、歌舞が得意であるということは容易に想像できる。

『土佐日記』には、酒に関わる説話が多い。十二月二十二日・二十四日・二十五日・二十六日・二十七日・二十八日・二十九日などは、酒を媒介にした説話である。なぜこれほど飲酒・飲食のことを話題にするのだろうか。

饗宴の場の設定条件で、飲酒・飲食あり、歌舞あり、これで必要十分条件が整ったかと言われれば、やはり何か欠如していることに気づくのである。それは、「語り」「咄」である。それも「をこの語り」「をこの咄」でなければならぬのである。宴の場は、談笑の場である。無礼講の場でもある。楽しい、愉快な、滑稽な話題が提供され、満座がどつと哄笑に沸くことが饗宴の場の充足感であろう。をこな話題の語り手は、期待され、もてはやされたのである。その「をこ語り」の語り手の一人が、紀貫之であったのだろう。酒を媒介にするのは、飲酒での成功譚などはほとんど無いに等しい。失敗譚ばかりである。「をこ」な咄ばかりである。その話を聴く者にとっては、その饗宴の場は、笑いの世界を共有することになるのである。もしこれが文学という芸術に止揚するならば、連歌や俳諧にいわれる座の文学、共

同体の文学の萌芽を見るのである。

たしかに具注暦のメモを基にして、『土佐日記』を書いたのであろう。しかし、萩谷朴氏が「土佐日記は、決してその（具注暦に日記を書きつけていた―筆者注）ような漢文日記をそのまま仮名文に翻訳したようなものではない」（『全注釈』四七〇頁）と述べているように具注暦のメモと、その現『土佐日記』への文章化は、ただちに直結しないのである。

樋口芳麻呂氏は『土佐日記』の二次成立説（『新撰和歌の成立』『国語と国文学』昭和四二・一〇）を提起され、「死児の母に示し、その悲しみをわかちあう目的を含んで作られた私的な、実録的な仮名文の旅日記」とする第一次形態と、「その後、日記を誰かに進献しようとした時に、女性に仮託した、虚構性の強い、現在の日記に書改め、和歌などの批評や見解も書加えた」のを第二次形態であると述べている。この「二次成立説」、すなわち「二段階成長説」は、ひじょうに興味ある説である。しかし樋口氏の、第一次成立説は、具注暦のメモが、旅中の備忘録であり、貫之の、その時々々の出来事や感興なり、心情なりが記されていたとするならば、樋口氏の述べる「私的な、実録的な仮名文の旅日記」は、具注暦のメモとどれだけの差異があるのだろうか。

いま、『土佐日記』の「二段階成長説」を想定してみたい。すなわち具注暦のメモと、樋口氏の述べる第二次形態、現『土佐日記』との間には、「語り」「物語り」の世界が介在するという想定である。『土佐日記』の読者の存在以前に、聴き手が存在したのである。そして聴き手は、不特定多数ではなく、特定少数である。その聴き手とは、時の権力者、高位高官・中宮（皇后）・女御、そして、その人たちに仕えている女房たちである。

四

「をこ」とは、馬鹿げたことをすること、または馬鹿馬鹿しいこと、という意味である。

折口信夫は、「叙事詩の中に、既に実の物語と、しひ物語との両立してゐた事が考へられる。其まこととしひとの界は、諺なり歌なりの、解説にあるのだと思ふ。真実の正否はともかく、まことだと信じられたものと、諺・歌を主題とした『をこ』なる物語を説く、技術専門の語部の分化していたことは、思ふに余りあること、考へる。」（『折口信夫全集第十卷』所収「俳諧歌の研究」二七六―二七七頁）と述べ、実の物語と誣物語・をこ物語の系譜とが両立していたと論じている。「をこ語り」という言葉が存するとすれば、「誣語り」という言葉は、「万葉集」卷三の持統天皇と志斐姫の掛け合の歌に見出せる。

○いなと言へど 強ふる志斐のが しひ語り このころ聞かすて 我れ恋ひにけり（卷三―二三六）

○いなと言へど 語れ語れと 宣らせこそ 志斐いは申せ しひ語りと言ふ（卷三―二三七）

「誣語り」の「誣ひ」は、事実を曲げて強弁する。作りごとで人をおとしいれるという意である。また、折口信夫は「『誣ひ語り』と言はれてよい物語のあつた事が考へられる（中略）其内容は、常識から当然受容せられぬものであつた。嘘だと信じながら娛しみながら聴く物語があつたのだ。正の物語と否の物語とが、対立して来たのである。否の物語は、単に技巧だけのものであつた。真実でない事を、組み立て、行つたものには、技巧を享樂する事が目的とならねばならぬ」（『折口信夫全集第七卷』所収「口承文学と文書文学と」四三二―四三三頁）と述べ、更に「新しく、其（物語の―筆者注）確実さを軽蔑するやうなもの、機智で物語を引つくり返して笑ふやうなものが出て来た。私はをこ物語

（平仲・宇治拾遺）と呼んでゐるが、あまりに現実離れしてゐるため、誰でも嘘だと知ってゐるのである」（『折口信夫全集第十巻』所収「物語歌」一五一頁）と述べている。「をこ物語」は、前述の引用の視点からみれば、『竹取物語』『伊勢物語』も「をこ物語」の要素を包含していることは否定できない。

『土佐日記』も、「誣物語」「をこ物語」の系譜に位置するものである。たしかに、日付も一日も欠落することなく、正確に記されており、形式としては日次の記である。しかし『伊勢物語』には、『在五中将の日記』という別称もあり、『枕草子』にも『清少納言記』という名称がある。『平仲物語』にしても『本朝書籍目録』仮名部には、『平中日記』一巻」とあり、『河海抄』には、『貞文日記』と記されている。『土佐日記』は、旅行中、「具注暦」に、毎日の出来事を書き留めた日次記の段階から、「語り」の段階を経て、現『土佐日記』に至る過程において、すでに「物語化」、すなわち「をこ物語」化されていたのである。現『土佐日記』に対して、原『土佐日記』という存在は、貫之の「をこ語り」という「語り」に見られると考える。

「語り」の必要条件を考えると、先ず、語り手と聴き手が、同じ空間、それも、同じ平面上に位置すること。次に聴き手が、不特定多数ではなく、特定で少数であること。すなわち語り手も聴き手も、熟知の間柄であることである。三つめは、語り手は、言葉以外のパフォーマンス、言い換えると、ボディ・ランゲージを多用するということである。文章化した現『土佐日記』で、三つめの条件の理解把握はひじょうに難しい。解明しようとするれば、萩谷氏の述べる「戯曲構成」「脚色虚構」（『全注釈』四八六〜四九〇頁）の視点からしかない。語り手と聴き手の阿吽の呼吸を感覚的に感知しなければならぬ。とまれ、「をこ語り」の語り手貫之は、「をこの者」・「をこ人」なのである。いわゆる「道化」なのである。

「をこの者」「をこ人」について、柳田国男は「二人（『今昔物語』卷二十八・一話）舍人重方。〔四十二話〕臆病武士―筆者注）のやうなうつけた男を、今昔物語ではやはりヲコの者と呼んで居る。是はまちがひとまではいふことができないが、少しく注意をせぬと誤解に導かれる虞れはある。人をヲカシと思はせるのが、本来はいはゆる嗚呼の者であつて、右の二人はたまたまその一種の常習者に過ぎず、他にもまだ色々のヲコの者が居たのであり、それにも亦よほど専門に近いのがあつた。古い記録では、さういふのを嗚漕人と謂つた例が、『三代実録』などには有つて、是はたゞ単におかしいことばかり言つて、人を笑わせようとした者のことであつて当人は自らは決して馬鹿ではなかつた。そのヲコ人とかのヲコの者と、二つがそんなに種類を異にして居たらうことは、誰だつて想像し得ぬことであらう」（『定本柳田国男全集第七卷』所収「嗚漕の文学」二八九頁）と述べている。それは、馬鹿馬鹿しい行動をして、人に笑われる、うつけた「道化」と、人を笑わせようとする、賢い「道化」に分類されると言うことであらう。

高橋康也氏は、うつけた道化は「思慮分別を欠いた行動をする人間」を指す。日本語で「馬鹿なやつ」とか「馬鹿な真似をする」というときの「馬鹿」であり、「阿呆」と訳してもよい。右の意味の「阿呆」が「自分を阿呆にする」人間であるとすれば、「他人によって阿呆にされる人間」、つまり、「間抜け」「かも」も「fool」である」と説明し、そして、賢い道化は「『職業的道化』を指す言葉として、〈clown〉と同義である。中世ヨーロッパの謝肉祭や五月祭に不可欠な役を演じた道化、王侯貴族に抱えられた宮廷道化……」（『道化の文学』一二―一三頁）と述べている。

では、貫之はどちらに分類されるのであらうか。もうすこし高橋氏の文章を引用しよう。「道化」といった場合、狭義には、「職業的道化」の意味であることは断るまでもない。しかしその周辺にひろがる微妙な、あるいは重大なニュアンスの差を含んだ意味の多義性を無視してはならない。いや、言語的多義性にとどまらず、あらゆる矛盾した様相が

『道化』の現実の姿に現れているのである。(中略)『道化』とは「賢」なのか「愚」なのか……、おそらくそのような二者択一的設問の根拠となる枠組みをとっぱらうことこそ、『道化』の任務なのである」(『道化の文学』一四頁)と述べている。貫之は、まさに「うつけ」を演じ、その「うつけ」を「をこ語り」する、両義性を有する「をこ人」「道化」と理解されるべきである。

五

をとこもすなる日記といふものを

をむなもしてみむとてするなり

それのとしのしはすのはつかあま

りひとひのひのいぬのときにかとて

すそのよしいささかにものかきつく

『土佐日記』の冒頭の部分である。現在最善本とされている青谿書屋本(藤原為家自筆本系統)を、そのまま翻刻した。

「それのとしのしはすの……」の三行目は、明らかに改行されていることが確認できる。

『土佐日記創見』の注で【そのよし云々】は「其船中、帰路の事を、書つけ試むと也。これまでは、はしがきといふべし」としている。この序文説が踏襲され、「その(旅中の)様子」(『全注釈』五一頁)「以下全巻の記事内容をさす」(『新古典全集』一五頁)、「創見」の注を引用(『古典集成』一五頁)、「その旅の様子」(『新古典大系』三頁)とここ

までを序文とする説を採っている。しかし、作品全体を俯瞰すると、

○廿二日にいつみのくにまでと……

○廿三日やきのやすのりといふひと……

というように、日付ごとに改行してしているのである。この叙述手法に従えば、「それのとしのしはすのはつかあまりひとひのひのいぬのとき」という日付があるのだから、

○それの年の十二月の二十日あまり一日の日の戌のときに、門出す。その由、いささかにものに書きつく。

ある人、県の四年五年はて、例の事どもみなしをへて、解由などとりて、すむ館より出でて、船に乗るべきところへ渡る。これかれ、知る知らぬ、送りす。年ごろよくくらべつる人々なむ、別れがたく思ひて、日しきりにとかくしつ、ののしるうちに、夜ふけぬ。

のかたちが、第一段落であるべきである。すなわち「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」だけが序文であると考えるべきである。この考えに基づいて、「序文」について考察すると、

菊池靖彦氏は「女である筆者は、男の日記なるものの存在は伝聞しつ、その実体は知らぬ建前。よってこの日記という概念はかなり曖昧で、作者が都合よく利用する余地を残していることに注意。筆者を女性とすることによって、①平仮名表記、②歌を記すこと、③私的記事内容が可能となり、実記ならぬ日記文芸となる」(『新古典全集』一五頁)と述べている。これは、興味ある解釈ではないかと考えられる。

村瀬敏夫氏は『日本文学コレクション 土佐日記』の解説で、「船旅の労苦を、そうした経験の乏しい在京貴族階級の女性たちの好奇心に供しようとしたのだろう」と、宮廷社会の女性が貫之の視野にあったことを示唆している。

日崎徳衛氏が「女が書いたと初めに断わりながら、男でなければいえない卑猥なジョークをちよいちよい漏らしたりする所にこそ、その矛盾によって読者を笑わせようという作者の手のこんだ趣向があったのだろう」（『紀貫之』一五七頁）と述べるように、しゃれた、軽い発想から出たものかもしれない。

『創見』は「皆、女の女ならざるを見えしむる、あざれ也。（中略）大やう自記の体裁なるを、みすみす斯くもいひなせるは、まこと女にかくれて物せんとはあらで、ただかの思ふ心ありて也けり。かつ、この日記の、打まかせて、俳諧なる事は、まづ此発端の大どれたる調にも、聞きしるべし。たとひ其意正しくとも、其しらべたはれたらんは、もとより俳諧也」と述べ、「あざれ」「俳諧」であるとしている。すなわち「ふざけた、たわむれの戯言」であるとしているのである。これは、かなり正鵠を得た叙述ではないかと考えられる。

男の日記は、漢文日記、真名による日記である。実記である。それに対して、漢文の素養のない女が書くというのは、男の日記のパロディーをしようということである。実の世界から、虚構の世界への変換である。表現の世界での虚構の世界とは、物語の世界であり、あるいは物語化された世界である。その世界は、仮名でなければ表現できないのである。貫之の脳裏には、『竹取物語』の五人の貴公子の求婚譚や、『伊勢物語』の歌物語の世界が、沸沸と思ひ浮かんできていたであろう。だから、十二月廿一日の段落から、物語化の世界が始まるのである。

六

十二月二十一日の記事は、「その年の……」で始まる。「その年」は某年で、「擬装臈化」（『全注釈』五二頁）であるとしている。これは、物語の冒頭の常套表現である。『土佐日記』より先行の物語、『竹取物語』の「今は昔」、

『伊勢物語』の「むかし、男」も臚化表現である。臚化するということは、物語化しようとする貫之の意図が示されているということである。

「戌の時に、門出す」については、前述したように、門出としては異常な時間帯である。萩谷氏は「旅行の出発としては、はなはだ時刻が遅いようであるが、当時の旅行における門出とは必ずしも目的地に向って進発を意味するものではなく、単に方違えのために住居を出て、出発点を移すだけの門出もあつたから、さしつかえない。ただし、貫之は元来理知的な性格の人物で、あまり縁起をかつく方ではなかつたし、曆注を参照しても、特に戒むべき条件もないから、単に衆人環視を避けての夜陰の門出と解釈すべきであろう。ことに貫之の場合は、信任の国司に早く公館を明け渡す必要があつたのであつたと考えられる」（『全注釈』五五頁）と述べている。

「はなはだ時刻が遅い」とは感じられているが、「方違え」、「衆人環視を避けて」のため、そして「早く公館を明け渡す必要」性ということと解決しようとしている。これらは『更級日記』の記述を想定しての論述と思われるが、「九月三日の日の入りぎは」と「十二月二十一日の戌の時」という季節と時間帯の関わりで比較すると、『更級日記』は、陸行であるが、『土佐日記』は、十二月という季節、夜の船行。これらを考えると、やはり異常な時間帯と言わざるをえない。なにか特別の理由があつたのだろうか。

いま、物語化した『土佐日記』という視点から、二十一日の記事は、一つの短編として、一つの説話として、読むべきであろうし、あるいは、その説話の語りを聴くべきであろう。

「そのよし」は「旅の様子」・「以下全巻の記事内容をさす」ではなく、「戌の時に、門出す」の理由ということなのである。そしてその理由は「年ごろよくくらべつる人々なむ、別れがたく思ひて、日しきりにとかくしつづ、ののしるう

ちに、夜ふけぬ」ということなのである。「年ごろよくくらべつる人々」とは、「かれこれ、知る知らぬ」人々と、区別すべき人々であることは、文脈からして明らかである。

さて、諸本の校異表をみると、「くらべつる」ほど、異同の多い語は他に見当たらない。

青鉛書屋本（為家筆本）——くらへつる。定家筆本——くらへつる。日本大学蔵本——みえつる。近衛家本・宮内庁書陵部本——みへつる。三条家旧蔵本——くしつる。

濁点をつけて整理をすると、「くらぶ」「みゆ」「ぐす」の三種になる。当然、貫之自筆本があつて、それから書写してゆく過程において、「くらぶ」「みゆ」「ぐす」は、書写者の不注意、あるいは筆のすべり・勢いなどの説明では解決できない隔たりがある。仮に貫之自筆本が「くらべつる」であつたとして、為家や定家は「くらべつる」と書いた貫之の意図を理解したうえで、「くらべつる」と書写したと考える。そこには、書写者の文章解釈が入っているのは言うまでもないことである。「みえつる」「ぐしつる」と書写した人も、「くらべつる」の語意を、貫之の意図を理解してうえで「みえつる」「ぐしつる」と解釈して書写したのであろう。

萩谷氏は「仲よくつきあつていた。比という漢字を媒体として『くらぶ』と『ならぶ』『たぐふ』という異なる動詞間の意味が交流したものとと思われる」（『全注釈』五八―五九頁）、「交際していた人々」（『新古典大系』三頁）、「親しくつきあつてきた人々」（『古典集成』一一頁）など、おおよそ、萩谷氏の解釈の延長上にあると考えられる。

『土佐日記考證』は「ぐしつる」を採り、「しるしらずおくりする中に、としごろ具し使ひたるは、わかれがたくして、はやくかへらぬさま也」。『土佐日記解』は「みえつる」を採り、「度々来て、親しうし給ひし人々となり。知人を引き出でて云はれしなり」。『考證』の「具し」は、単純に「召し使っていた」とは考えにくい。もっと別の意味を持つ

のではないかと想像される。

『創見』は「ぐしつる」を採り、『年ごろよく具しつる』と、ほこりていへるは、例の、あざれ也」と述べている。そして「しる人も、見しらぬ人も、かの船場まで、ほどほどにおくりすと、いへり。中にも、此年ごろ、めしつかわれて、したしく出入せし人々は、ふたたび逢まじき別れを惜みて、さがてにせし也」とも述べている。これによると、「具しつる人々」は「年ごろ、めしつかはれて、したしく出入せし人々」ということになる。

『考證』の「具し使ひたる」と『創見』の「めしつかはれて、したしく出入せし人々」が同義の関係にあるとすれば、近世語的な発想からすれば、正妻以外に男女の関係を持った女性ということになる。

「あざれ」は、『土佐日記』では、十二月二十二日の記事にも出てくる言葉であるが、人間の言動について言うときは、くだけた振舞をする。ふざける、という意である。

『創見』は、「貫之が、『よく具しつる人々』と言ったのは、読者（聴き手）に対して自慢しているんだよ。しかし、それは戯言、冗談、ジョークなんだよ」と述べているのである。

これが、戯言、冗談、ジョークならば、「そのよし」の指示する部分「年ごろよくくらべつる人々なむ……夜ふけぬ」の文節も、「あざれ」・戯言でなければならぬはずだ。

ここで、「くらべつる」・見えつる」・「具しつる」は、同義語の関係にあると解釈する。そして江戸時代の学者は、好んで「見えつる」・「具しつる」を採っている。「見ゆ」には、「夫婦の交わりをする・異性と肉体関係を結ぶ」の意味がある。「具す」にも、「配偶者となる・夫婦として連れ添ふ」という意味がある。「くらぶ」には、「親しく交際する・心を通わせる」という意味がある。三つとも、男女の関係を話題にする際に用いる語であるという共通項を持つのであ

る。六十五歳をも越えた、老いばみ、老醜も目立つ貫之が、年配の女房たちを前に、「土佐の国で、長年関係を持った女たちが、別れがたいと言って、一日中、酒宴を催して、詩歌管弦を楽しんだりしてうちに、夜も更けてしまい、戌の時になってしまった」と得意げ、自慢げに語れば、世慣れた女房たちは、腹を抱えて、大爆笑したのであろう。それが酒宴の場であつたなら、なお一層の笑いの渦が生じたであらう。聴き手の誰もがそんなことはありえないと思つてゐるから。貫之は十分に「をこ人」の役割を果たしたのである。貫之が、「戌の時に、門出す」の特別の理由とは、このようなことなのである。

これが「をこ語り」の場であり、同じ空間で、聴き手（読者）が、熟知の間柄でないと、また語り手のボディ・ランゲージが伴わないと、この笑いの世界は成立しないのである。「人々（女たち）」と複数にしたりして、笑いのポルテージを高めているのである。

『創見』に、「さる夜陰に、かどですと、打まかせていへるも、実さまならずや。戌の時など、かかずても有りなんを、わざと、しひてもいへる、みなあざれの外ならず」とあるように、「戌の時に、門出す」も「あざれ」、戯言、虚の世界、物語の世界の時間帯なのである。現実はずっと早い時間に出発したのであろう。土佐日記の旅立ちは、物語・「をこ物語」の世界からのそれなのである。故にその旅も、虚実の狭間の旅なのである。

七

「をこ語り」で、聴き手（読者）に笑いの強烈な衝撃を与えたであらうと思われる説話が二つほど抽出できる。

○芋莖、荒布も歯固めもなし。かうや、うの物なき国なり。求めしもおかず。ただ押鮎の口をのみぞ吸ふ。この吸

ふ人々の口を、押鮎もし思ふやうあらむや。今日は都のみぞ思ひやらるる。「小家の門の注連繩の鮎の頭、柀ら、いかにぞ」とぞいひあへなる。(二元日)

押鮎を頭から食べることを、キスに見立てて、押鮎を擬人化して「思ふやうあらむや」と性的に感じていることを想像させ、その押鮎が、都の恋人である鮎の頭や柀を恋しく思うと擬人化して「をこ語り」化しているのである。

○女これかれ、沐浴などせむとて、あたりのよろしきところにおりてゆく。(中略) なにの葦陰にことづけて、老海鼠のつまの胎鮎、鮎鮎をぞ、心にもあらぬ脛に上げて見せける。(二月十三日)

乗船している女性たちが、沐浴しようとしているところを垣間見る図である。「老海鼠」「胎鮎」「鮎鮎」は、比喩的表現であるが、男女の性器の表現しているのである。「いつしかとまたく心を脛に上げて天の川原を今日やわたらむ」(『古今集』卷十九雑体一〇一四 藤原兼輔)のパロディー化したものともいえるが、表面的には視覚的に捉えた表現であるが、臭覚的なものをも包含した表現でもあるとすれば、相当露骨で、猥雑で、「をこ」的表現そのものである。酒がなければ語れないだろうし、酒があるからこそ、聴くに堪え、その場に笑いの場、世界が構築されたのである。

十二月二十六日の説話にも注目したい。新土佐守島田公鑒からの招待の送別の宴の二日目である。

○あるじしののしりて、郎等までに物をかづけたり。漢詩声上げていひけり。和歌、主も客人も、こと人もいひあへり。(中略)とかくいひて、さきの守、いまのもの、もろともにおりて、いまの主も、さきのもの、手とりかはして、酔ひ言に心よげなる言して、出で入りにけり。

とあるように、漢詩も和歌も朗詠し、新田の国司が手を取り合つて酔った勢いで、気持の良い言葉を言い交わして別れたのだから、送別の大宴会であつたわけである。注目したいのは、漢詩も和歌も声を出して朗詠したということであ

る。当時は漢詩も和歌も声に出して歌うものであった。だからこそ、後年『和漢朗詠集』なる詞華集が作られるのである。また「酔ひ言に心よげなる言」を弄したということは、をこなる物言いが存在したということである。

原『土佐日記』を、貫之が「をこ語り」するときには、声を出して歌ったのだろう。もちろん大きな身ぶり手振り、パフォーマンスも伴ったのであろう。

○ある人々、をりふしにつけて、漢詩ども、時に似つかはしきいふ。またある人、西国なれど甲斐歌などいふ。
(十二月二十七日)

○行くさきに立つ白波の声よりもおくれて泣かむわれやまさらむとぞよめる。いと大声なるべし。(二月七日)

○船子、楫取りは、船唄うたひて、なにとも思へらず。

春の野にてぞ、音をば泣く、わが薄にて切る切る、摘んだる菜を、親やまばらむ、姑や食ふらむ、かへらや。

夜べの、うなるもがな、錢乞はむ、虚言をして、おぎのりわざをして、錢も持て来ず、おのれだに来ず。

これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれども、心はずこし風ぎぬ。(二月九日)

これらの説話を語るとき、貫之は、声に出して歌い、かつ語ったのであろう。特に一月九日の、船子、楫取り歌う「春の野にてぞ……」「夜べの……」については、貫之の、大仰に歌いかつ舞いながら、語る、これらの説話を聴いていた聴き手、たとえば女房たちも、大いに笑ったことであろう。「をこ人」としては、面目躍如なるものを感じたであろう。この笑いは、萩谷氏は、これらを民謡であるとし、「民謡というものは、人間本来のエロティシズムに根差したものが多く、ペーソスもユーモアも、その上に施された彩りと考えられる」(『全注釈』一七五頁)と定義している。エ

ロティシズムに起因した語りは、裸の人間の精神から生ずる「をこ語り」なのである。

長谷川政春氏は、「土佐日記に底流する作者貫之の精神を、『自由な精神の横溢』と見ることなく、また、『生涯の末に来て、老人の取った洒脱な筆の跡』とも言い難く、常に相手（読者）を意識し、その相手の感興を得ることに心が動いているという、言わば幫間的精神である」（『紀貫之論』九四頁）としている。すなわち自由な精神の横溢性が見られないとする。

「をこ語り」の世界は、自由な世界、むしろ放埒、無頼の世界かもしれない。もちろん共通の了解、ルールが存在し、そのことである。それは「をこ語り」の世界を構築する、笑いの世界を形成するという約束である。そこには身分という上下の關係は存在しない。語り手と聴き手が、同じ空間、同じ平面に位置しているのである。対等感に基づいた、笑いの世界への同化作用なのである。貫之も、饗宴の場、「をこ語り」による「をこ」の世界、笑いの世界を構築・形成するという、身分の上下、男女の区別もなく、まったく自分の身分・立場を離れ、撰関政治社会の埒外の存在として、自由に、原『土佐日記』を「をこ語り」をしたのである。そこに自由放埒な精神を見るのである。「をこ精神」とは、人間本来の本能という主体性を主張する「自由の精神」なのである。『土佐日記』に、紀貫之の、宮廷歌人でもなく、しがない受領階級でもない、自由放埒の精神を見るのである。酔いが醒めると、撰関政治社会という政治的ヒエラルキ―の機構的弱者に回帰するにしても。

引用した参考文献

- 岸本由豆流 『土佐日記考證』 文化二二 (土佐日記古注釈大成)
香川景樹 『土佐日記創見』 文政六 (土佐日記古注釈大成)
田中大秀 『土佐日記解』 文政一二 (土佐日記古注釈大成)
目崎徳衛 『紀貫之』 吉川弘文館 昭和三六 (新装版 昭和六〇)
柳田国男 『鳴滸の文学』 (定本柳田国男集第七卷) 筑摩書房 昭和三七
折口信夫 『口譯萬葉集』 (折口信夫全集第四卷) 中央公論社 昭和四一
折口信夫 『口承文学と文書文学と』 (折口信夫全集第七卷) 中央公論社 昭和四一
折口信夫 『物語歌』 『誹諧歌の研究』 (折口信夫全集第十卷) 中央公論社 昭和四一
萩谷朴 『土佐日記全注釈』 角川書店 昭和四二
高橋康也 『道化の文学』 (中公新書) 中央公論社 昭和五二
村瀬敏夫 『紀貫之伝の研究』 桜楓社 昭和五六
品川和子 『土佐日記全訳注』 (講談社学術文庫) 昭和五八
長谷川政春 『紀貫之論』 有精堂 昭和五九
木村正中 『土佐日記 貫之集』 (新潮日本古典集成) 新潮社 昭和六三
長谷川政春 『土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』 (新日本古典文学大系) 岩波書店 平成一
村瀬敏夫 『日本文学コレクション』 土佐日記 翰林書房 平成六
萩谷朴 『影印本 土佐日記(新訂版)』 新典社 平成六
菊池康彦 『土佐日記 蜻蛉日記』 (新編日本古典文学全集) 小学館 平成七